

## 仏弟子としての自覚 — 日本の摩訶迦葉・慈雲尊者飲光

ゴータマ・シッダールタ(釈迦)は、紀元前5世紀ころインド北部に生まれ、80年の生涯で説いたその教えが現在にまで生き続ける稀有な存在である。この偉大なブッダが滅した後、次に悟りを開くのは兜率天にいます弥勒菩薩で、56億7千万年後という遠い未来だという。そこまで先だと、日本列島はおろか太陽系の寿命すら危ぶまれる想像もつかないスケールの話である。悟りを開いた方には是非みえたいし、お話も伺ってみたいものだが、とても待つことなどできない。辺土たる列島人は仏教伝来以来その教えに直接触れることのできない無仏時代を生きることになる。

さて、ここで紹介したいのは、ある僧侶の名前にまつわる問題である。この辺土で愚直なまでに仏弟子であることを自任したその僧は、釈迦在世時の言語や袈裟を研究し、正しい戒律の復興を目指した。無仏時代にあつて、弥勒当来まで仏法を伝えるためである。

その僧とは慈雲尊者飲光である。慈雲は享保三年(1718)大坂・中之島の高松藩蔵屋敷に生まれた近世大坂を代表する名僧である。その正法律とよぶ釈迦在世時の戒律を復興しようとする運動とともに、書家としてもあるいは大坂町人に愛された『十善法語』の著者としても著名であること、わざわざ申し添える必要もなからう。

その慈雲の署名や落款印は様々であるが、一例に当館寄託品から紙本墨書《満足》を挙げておこう(図1)。落款印として朱文方印「慈雲」と白文方印「<sup>びっしゅ かいじゅう</sup>苾芻迦撰波」(図2)を捺す。このように慈雲は「迦撰波」「梵音迦葉此云龟氏」等同様の印を多種用いており、漢字・梵字で「迦撰波」と署名することがある。この迦撰波とは、釈迦の十大弟子のうち頭陀第一と称された高弟・摩訶迦葉波(迦撰波)のことで、仏滅後には第一結集を主宰し僧団の引き締めにあたったこと、釈迦より衣鉢を受け継ぎ弥勒当来を待つことは周知のことであろう。

なぜ、慈雲は迦葉を名乗るのか。唐・慧琳の『一切経音義』には「大飲光は即ち大迦葉波の美称也」とか「迦葉波、此飲光を云う也」などとあつて、飲光とは迦葉波(カショーバ)の漢訳であることが指摘されている。このことは唐の昔から知られていることで、種々の慈雲伝にも当然のごとく記されている。つまり、慈雲が自ら名乗ったと伝える諱・飲光とは迦葉の漢訳なのである。

このことの意味について三浦康廣氏は「釈迦第一の弟子に挙げられ、法を伝授された迦葉(=飲光)の名を諱とされていることは、尊者が「釈尊の直弟子」を以て自任した志を明白に物語っている」とする(同氏編著『慈雲尊者墨蹟集成 解説編』思文閣出版、1989年)。このように、慈雲尊者の諱が飲光であること、またそれが釈迦の高弟・迦葉の漢訳であることは先学諸氏がすでに指摘するところで、ここで改めて主張すべき新発見でも何でもない。しかし、あえて紙幅を費やしてそのことを強調するのは、慈雲尊者の戒律復興運動、とくに美術史に関わる場所では『方服図儀』に代表される袈裟研究と『梵学津梁』一千巻に大成された梵



図1 紙本墨書《満足》 慈雲筆 大阪中之島美術館蔵(当館寄託)

字悉曇学研究とは、慈雲がこの飲光なる諱を自ら選んだという強い意思表示と深く関係すると考えるからである。

慈雲尊者は「弘法大師の再来」と呼ばれ、また「小釈迦」と呼ばれた。かの高楠順次郎に至っては「今釈迦」とまで呼ばれたことを示して尊んだ。真言僧として、あるいは

仏僧としてこれ以上の榮譽はないだろう。ところが、慈雲尊者自身は日本の迦葉たらんとしたのではなかったか。名は体を表すものだとすれば、慈雲の根幹となる信条をそこに見るべきである。そのことを改めて認識する必要があるのではないだろうか。慈雲尊者の梵字・袈裟の研究をはじめ戒律の復興といった活動は、すべてこの仏弟子としての強い自覚、しかも弥勒当来まで衣鉢を受け継ぐ迦葉たらんとした自覚の上に立つことを知る必要があるのではないだろうか。

単純化は捨象を生む危険な行為である。慈雲の思想と行動とをすべて迦葉と結びつけて解釈することは慈雲の幅広い活動をかえって矮小化しかねない。しかし、頭陀第一の仏弟子として釈迦の衣鉢を継ぎ、仏滅後の僧団をまとめた迦葉の功績を讃えた慈雲は、飲光と名乗り日本の迦葉たらんとしたのである。とすれば、果たして日本の仏僧のうちここまで仏弟子であろうとしたひとがあつただろうか。

実は、慈雲が飲光という諱を名乗った時期や契機、選んだ典拠などについては明確なことが分かっていない。ここで述べたようにこのことが慈雲の様々な活動の根幹にかかわる問題として考えられるならば、今後探求しなければならない大きな課題が残されていることになる。

ところで、上掲の《満足》ははじめ慈雲作品などを所蔵する大阪中之島美術館が慈雲尊者生誕の地である中之島にオープンする予定である。作品は衣鉢よろしく新館へと引き継がれることとなる。いわば里帰りに文字通り「満足」してくれるだろうか。これは遠い未来ではなく、来春の話である。

(児島大輔)



図2 同部分 落款印「苾芻迦撰波」